看護婦姉妹と令嬢実習生

魅惑の入院体験

岡下誠

挿絵／ズンダレぽん

リアルドリーム文庫／PDF立ち読み版

KTC KEY TIME COMMUNICATION

Contents

目次

序章 …… 4
第一章 初めての入院生活 …… 14
第二章 排尿の看護 …… 51
第三章 看護実習 …… 88
第四章 浴室での特別実習 …… 127
第五章 潔癖症の治療方法 …… 166
第六章 真夜中のナースステーションで …… 202
終章 …… 236

登場人物 *Characters*

板橋 彰
（いたばし　あきら）

20歳の大学生。都内のマンションで一人暮らし。テニスサークルに所属している。細身の中性的な容姿で、優しい性格。

白羽根 百合
（しろはね　ゆり）

大学病院に勤める28歳の中堅看護婦で、彰の従姉。看護婦だけあって男性の身体などは見慣れており、性には寛大で積極的な性格。

白羽根 蘭
（しろはね　らん）

百合の妹。姉と同じ大学病院に勤める看護婦で25歳。明るく勤勉な性格だが、性のことについてはやや奥手。

姫宮 紫穂里
（ひめみや　しほり）

看護学校の学生。旧華族の家系の生まれで19歳。非常に真面目だが、かなりの世間知らずのお嬢様。

『第四章　浴室での特別実習』より

「あひっ……あああああああぁぁぁぁぁぁ……」
官能美に満ちた女体が、歓喜の悲鳴とともにのけ反った。牝欲がわだかまっていた女肉穴を奥の奥まで押し広げられ、めくるめく快楽を奏でられたのだ。たくましい肉柱に貫かれた百合は、ぐったりとなって彰の胸に上体をもたれさせていた。
「はううぅ……。百合姉さんのあそこ……気持ちいいです……」
彰も歯を食いしばっている。甘美な潤みを帯びた秘粘膜で男根をこすられ、気持ちよさのあまり危うく暴発させてしまうところだった。強ばりきった肉柱はひとりでにびくびくと脈動し、女肉穴の奥深くをえぐりまわしている。
「彰くんのおちんぽ、本当にたくましいわ……。女啼かせの肉杭ね」
百合は陶酔の眼差しで彰を見つめ、その後に指導教官の視線で紫穂里を見た。
「乳房で石鹸をぬりつけたら、こうやって女性器でしごき洗いするのよ……」
ストッキングを着けた美脚に何とかして力を込め、ゆっくりと腰を上げ下げし始める。蜜汁が滴る女陰口で男性器の根本にむしゃぶりつき、先端部分の亀頭へいたるまでしごき上げた。やわらかでいながら弾力のある秘粘膜を肉杭に絡みつかせ、しっとりとした吸いつきで愛撫する。
「んあぁぁ……あっ……あん……。彰くんのおちんぽ……気持ちいい……」

初めはゆっくりだった腰づかいも、上下動を重ねるうちに少しずつ激しくなっていった。女の喜びに突き動かされて、豊乳が揺れ弾むほどに尻肉を躍動させている。彰の肩に置いていた手で首に抱きつき、泡にまみれた豊乳を彰の胸にすりつけた。牝欲の坩堝(るつぼ)となった女陰穴で男性器にむしゃぶりつき、嬉し泣きしつつ喰い締めている。

「はふぅ……あっ……あうううっ……。百合姉さんのあそこ……とっても……」

淫奔な腰づかいで乗り犯され、甘い蜜汁に濡れ潤んだ女陰穴で男性器をむしゃぶり吸われ、彰は歓喜に悶えていた。肉柱の根本では大量の精液が煮えたぎっており、今にも噴き上げようとしている。射精をこらえるだけでやっとだ。

「僕……ぼく……もう我慢できません……」

切迫した声音で彰は訴える。しかし……。

「そう？　だったら、名残惜しいけれど……」

いきなり百合は立ち上がり、女陰穴でくわえ込んでいた男性器をぬぽんと引き抜いてしまう。不意にお預けをされて、彰の男性器は未練がましくふるえていた。

「え……？　百合姉さん、どうして……？」

やりどころを失った牡欲に悶えている彰へ、百合は蠱惑的に微笑みかける。

「もっといいところで出させてあげるわ……」

肉感的な眼鏡看護婦は、彰の腰をまたいだまま立っていた。そのため、何も穿いていない股間が彰の目の前に突きつけられている。濃密に茂る陰毛の下では、咲き誇る女陰花が未練に泣き濡れていた。突然のお預けに悶えているのは百合も同じらしい。

「今は紫穂里さんの実習なの。だから……ね？」

眼鏡の奥にある瞳は、嗜虐と欲情とが入り混じって妖しい光を放っていた。

（そ、それって……もしかして……）

彰は嬉しい予感に心を躍らせる。満たされない情欲に悶々としていた男性器は、一転して期待と興奮に反り返った。亀頭の鈴割れからは欲情汁がもれ滴る。

（でも……でも……紫穂里さん……処女なのに……？）

そんな彰の心配をよそに、百合は指導教官の口調で実習生に命じた。

「こっちにいらっしゃい。患者の男性器を実際に洗ってみなさい」

「は、はい……。承知……いたしました……」

美乳を捧げての看護にいそしんでいた紫穂里は、かすかに声をうわずらせている。ぷっくりとふくらんだ乳首が背中でこすられるたびに快楽を奏でられ、すっかり発情してしまったようだ。あるいは、指導教官のお手本を見ているうちに、まだ男性を知らない処女肢体が秘めやかな興奮に熱く高ぶってしまったのかもしれない。

立ち上がった紫穂里は、胸元から股間まで白泡にまみれていた。ほどよい大きさの美乳も、淡い下草に飾られた姫唇も、濃密な泡で覆い隠されている。それでも恥ずかしさをぬぐいきれないのか、令嬢実習生は顔を赤らめながら彰の腰をまたいだ。

「あの……彰さん……。つたないとは思いますが……よろしくお願いします……」

百合も彰の腰をまたいだままなので、二人の女体は触れ合うようにして重なっている。眼鏡をかけた指導教官は、後ろから紫穂里の腰に腕を絡みつかせた。

「私が直々に腰づかいを指導してあげるわ。両手を患者の肩に置いて、ゆっくりと腰を落としなさい……」

うながされるまま、紫穂里はおずおずと膝を曲げてゆく。裸身の実習生と、扇情的な半裸の美肉看護婦とが、ぬらぬらとぬめ光っている女体同士を密着させながら尻肉を沈み込ませているのだ。白泡にまみれた処女姫唇が男性器へ押し当てられる。

「ひぁぁっ……」

男の象徴を処女陰門の粘膜で感じ、紫穂里はびくんを裸身を引きつらせた。

「どうかしら、紫穂里さん？　あそこの粘膜で男性器にさわってみた感想は？」

「と、とってもたくましくて……熱くて……あぁぁ……」

かすかに背けられた美貌は紅潮し、その瞳は陶酔に濡れ潤んでいる。

男性器にふれたことを単に恥じらっているだけではなく、何かしら女性の本能的なものを刺激されて、表立って口にできない類の興奮を覚えている様子だ。
（おおっ……。紫穂里さんのあそこに……ちんぽでさわっているよ……）
彰の男性器も、清純無垢な令嬢の姫花肉を感じて、牡の興奮に身を跳ねさせる。
「まずは、陰毛とあそこで男性器をこすり洗いするのよ」
眼鏡をかけた指導教官は、実習生の股間に手を這わせて、そこに息づく処女陰門を割りくつろげた。さらに、自身の股間で紫穂里の美尻肉を押し、割りほころばせた処女姫唇で肉柱の側面をくわえ込ませる。そして、ボディソープにぬめり輝く女体で実習生の腰へ抱きついたまま、ゆっくりと腰を上げ下げした。
「ひっ……あぁぁ……あひっ……あん……。あそこが……こすれて……んあぁ……」
百合の腰づかいに合わせて、割り広げられた女陰門が肉柱にこすり上げられる。
そのたびに紫穂里は身をのけ反らせ、歓喜の悲鳴を上げていた。まだ穢れを知らない秘粘膜が男の象徴にこすり上げられるたび、女の喜びが奏でられているのだ。男性器のたくましさや熱さを女陰の粘膜であらためて実感させられ、どんなに清らかな乙女にもひそんでいる牝を否応なくかき立てられてしまう。
「んはぁ……あひ……そんなに……こすられると……おかしくなってしまいます……」

「こうしてあそこでこすり洗いすると、患者の男性器の腫れ具合がよくわかるの」
眼鏡の奥の瞳は淫らな嗜虐に光っていた。百合の女陰は中途半端にお預けされて悶々としており、牝の欲望を煮えたぎらせている。その満たされない牝欲が、女神のような慈愛にあふれる百合を淫らな責めに駆り立てているのだ。
「こういう風に、しっかりと丁寧に腰を使うのよ。よく覚えておきなさい」
牝情のわだかまりをぶつけるかのように百合は淫奔に腰を揺すり舞わす。それに合わせて令嬢実習生の股間もうねり踊った。ボディソープにぬめ光っている女体同士がぬらぬらと絡み合い、喘ぎをもらしながら悶えくねっている。紫穂里は、清らかな処女では考えることもできないような腰舞を演じさせられ、恥じらいに啼いていた。
「そんな……あぁぁっ……あひぃっ……恥ずかしいです……んあぁ……あん……」
だが、紫穂里を恥ずかしがらせているのは、ふしだらな腰舞を強いられているからだけではない。割りくつろげられた女陰の秘粘膜を男性器でこすり上げられ、官能の喜びを響かされているのだ。看護をしている最中なのに。
「あぁぁ……私……看護の最中なのに……んっ……んんっ……ああん……」
穢れを知らない秘粘膜が男の象徴で摩擦されるたび、紫穂里は性の喜びに悶えている。初々しい姫花肉に官能の音色が響き渡り、細身の裸体が喜びにわなないていた。

「紫穂里さん、今度はあなたひとりでやってご覧なさい」
百合は、実習生の耳元にささやきかける。
「患者の男性器をあそこで洗って、腫れを鎮めてあげるのよ」
その息吹だけで、ナースキャップしか着けていない裸身はびくんと引きつった。
「は……はい……」
紫穂里は、彰の肩にしがみついたまま、緩慢な動きで腰をつかい始める。自らの意思で股間を上げ下げしているのだ。男の象徴たる肉柱へ、清らかな姫花肉をすりつけている。官能に潤んでいる姫花弁で、まがまがしい男根をこすり上げていた。
「はうぅぅ……。紫穂里さんまで……あそこで洗ってくれるなんて……」
燃えたぎるような牡欲がこみ上げてきて、彰は男性器を激しく脈動させる。
「こ、これも……彰さんのためですから……はぁぁ……あぁぁ……あん……」
純真無垢な令嬢実習生は、心よりこの実習を信じきっているようだ。澄んだ瞳に浮かんでいるのは患者に対する真心と……こらえようとしてもこらえきれない牝欲。看護に対する真摯な責任感と女体に渦巻く快楽との間で、紫穂里は揺れ惑っていた。
「んあぁ……あっ……あひぃぃ……。も、申し訳ありません……。彰さんのものにこすられて……気持ちよくなってしまって……あひっ……あんっ……」

白く細い肢体は女の喜びに悶え、清楚な色合いの姫花肉は蜜汁を滴らせている。薄桃色の乳首はぷっくりと尖り立ち、姫花肉に息づく女芯も包皮から剥け出るほどにふくらんでいた。全ての蕾を膨張させて、女体の発情ぶりを訴えている。

「はぁぁ……あぁぁ……。気持ち……よすぎて……脚に力が……」

生娘では処理しきれないほどの過大な快楽を味わわされ、しなやかな美脚が細かにわなないていた。膝に力を入れられず、ぐったりとなって彰の胸板に顔をうずめてしまう。こすっているだけなのに、脱力するほどの快楽に見舞われてしまったのだ。

「んあぁぁ……あっ……あひっ……。昨夜みたいに……おかしくなってしまいそうです……。いってしまいそうです……ひっ……んはぁぁ……」

処女花肉で快楽を奏でられ、紫穂里は女の喜びに悶え啼いていた。

上の唇で啼くとともに、股間に息づく秘めやかな唇も歓喜に泣いている。処女の封印を施された膣穴をきゅうきゅうと収縮させ、喜びの涙をしとどに流していた。

「あらあら、紫穂里さんったら。患者の男性器を洗っているはずなのに、あそこのお汁で汚しちゃっているじゃないの」

「えっ？　あっ……も、申し訳……ありません……んひっ……ああんっ……」

脱力しきった紫穂里を見て、百合は眼鏡の奥の瞳を妖しく濡れ輝かせている。

「そろそろ頃合いかしらね……」
口づけするかのように実習生の耳元へ唇を寄せ、媚熱を帯びた息でささやきかけた。
「こすり洗いは十分よ。今度は、あそこのお口でしごき洗いしなさい……」
「えっ……でも……。わ、私……その……初めてで……」
紫穂里の顔に戸惑いが浮かんだ。それを間近で見つめている彰も思わず息を飲む。
思い悩んでいる令嬢実習生の背後では、指導教官が嗜虐の微笑に唇を歪めていた。
「これは基本的な看護よ。患者のことを思えば、できないはずないでしょ」
うつむいている紫穂里の向こう側から、百合は彰に艶麗な視線を投げかける。
(はうぅぅっ……。百合姉さん、本気だ。紫穂里さんに本気で処女喪失させる気だ)
処女秘唇を味わえると思っただけで、彰の男性器は興奮に力強くのたうった。
そびえ立つ肉柱の脈動が無言の催促となったのか、紫穂里はびくんと裸身を引きつらせた。男性器のたくましさを姫唇で思い知らされ、決心をうながされたのだ。
「承知……いたしました……。患者の……いえ、彰さんのためですものね……」
そう言って紫穂里は彰の顔をちらりと見る。気品の香る美貌には、処女を失うことへの恐怖と、大人の女になることへの陶酔とが、分かちがたく入り混じっていた。
「私は手伝ってあげられないわ」

百合は、紫穂里の背中から身体を離して立ち上がる。
「自分の意思で男性器に身を捧げ、大人の女になりなさい……」
百合は彰の背中に抱きつき、たわわに実った豊乳を押しつけた。女体を上げ下げして乳房をすりつけ始める。とはいえ、彰の背中をこすり洗いしている……というよりも、牝欲に喘いでいる乳首を背中にこすりつけて自慰にふけっているかのようだ。
「あ、彰さん……。初めてなので上手にできないかもしれませんが……私のあそこで……しごき洗いをさせてください……」
恥ずかしさと恐れに揺れ惑っている紫穂里は、力の入らない腕で彰の首筋にしがみついて、やっとのことで尻肉を浮かせる。
「紫穂里さんに洗っていただけるなんて……光栄です……」
彰も、緊張と興奮に声をふるわせていた。
つい昨日までは自慰すらもしたことのなかった令嬢実習生は、咲きほころんでいる姫花びらを、醜く肥大した亀頭の頂にふれさせた。
少しずつ、少しずつ……処女喪失に恐れおののきながら尻肉を沈み込ませてゆく。
笠を広げた肉瘤は、清らかな薄桃色をした姫花弁を押し分け、封印のなされた膣口にめり込んでいった。蜜に潤んだ小穴をえぐり広げ、そこに異物感を味わわせる。

「あぁぁ……彰さんのものが……跳ねています……ひっ……ひぃぃ……」
彰の腰にまたがったまま紫穂里は小さな悲鳴を上げていた。
男性器の脈動は、これまでも唇や女陰門で味わわされてきたが、処女肉穴に亀頭をえぐり込まれかけた状態で感じる脈動は、はるかに力強く、ずっと恐ろしげだ。おぞましいくらいに膨張しきった亀頭で初な女肉穴をえぐられ、牡のたくましさを思い知らされる。これまでの看護で発情していた女体は、亀頭にみなぎっている牡欲を感じ取って、ますます官能をつのらせてしまった。
紫穂里の心は恥じらいと恐れに揺れているのだが、ナースキャップしか着けていない女体はふしだらな高ぶりに見舞われている。それが証拠に、亀頭の先端をめり込まされた女肉口は、物欲しそうに収縮して蜜汁をあふれさせていた。
（あぁぁ……紫穂里さん……。すごくきれいです……）
彰は、令嬢実習生の姿を喰い入るように見つめている。
まがまがしくそびえる肉柱へ身を捧げようとしている紫穂里は、生け贄とされた聖処女さながらであった。看護婦としての使命感に突き動かされて、処女を散らせてまで患者に尽くそうとしているのだ。
その姿が悲愴であればあるほど、牡の興奮をかき立てられる。

いや、紫穂里の姿は単に悲愴なだけではない。処女から大人の女に羽化しようとしていることへの秘めやかな高ぶりをも見て取れた。

「ふふふ……。何だか、見ているだけでぞくぞくしてくるわね……」

百合は、ゆっくりと女体をうねらせて彰の背中に豊乳をすりつけ、女の喜びを貪っている。豊乳をすりつけているだけでは我慢しきれなくなったのか、自らの手を股間に這わせて、茂みの中に息づく女陰花を恥ずかしげもなくかきまわしていた。

「えっ……？　あ、あの……百合姉さん……オナニーしているんですか？」

「紫穂里さんの実習のためとはいえ、彰くんのおちんぽを途中までしか看護できなかったでしょ。あそこがむずがってむずがって、こらえられなくなっちゃうの……」

男性器から発せられる牡欲にあてられ、おまけに百合の自慰対象にまでされた紫穂里は、恥ずかしさと高揚に見舞われつつ徐々に尻肉を落としていった。

「んあぁ……ひっ……あひっ……。彰さんの……太い……太すぎます……。これ以上入りません……んっ……んんっ……」

亀頭の先端部分を膣口でくわえ込んでいるのだが、何かが引っかかってそれ以上は受け入れられない様子だ。それでも、まがまがしく魁偉（かいい）な肉杭に姫唇を捧げようとしている様は、自らの女体を進んで生け贄に供した聖処女そのものである。

「確かに彰くんの男性器は平均値以上の太さだけれど、膣口での受け入れは可能よ」
「でも……んっ……んんっ……んはぁぁ……」
紫穂里は何度か尻肉を沈み込ませようとするのだが、そのたびに処女膜に阻まれて思いとどまってしまう。乳首も女芯もぷっくりと尖りきっているし、膣口からはだらだらと蜜汁を滴らせているのだが、最後の一線を越えかねていた。心理的なものが原因で、自分では腰を落としきれないらしい。
「し、紫穂里さん……。はやく……してくれないと……僕、もう……」
清らかな令嬢実習生は、そびえ立つ男性器の上にしゃがみ込もうとしては、弾かれたように尻肉を跳ね上げていた。中腰姿勢でためらい惑っているその仕草は、男性器をじらしているようにすら見える。処女肉穴で亀頭を吸いむしゃぶられ、男性器はもどかしい快楽に跳ね悶えていた。欲求不満を訴えるように欲望汁をあふれさせている。
「彰くんのおちんぽ、生娘には大きすぎたのかもしれないわね」
処女喪失を前にして心を揺らしている令嬢実習生と、じれったい快楽に呻く患者。
それを見つめている百合の瞳は、淫夢魔さながらに妖しく光っていた。女陰をかきまわす指づかいはいよいよ激しく、じゅぷじゅぷという濡れ音が浴室に響くほどだ。その息づかいは切迫しており、今にも気をやってしまいそうである。

「やむを得ないわね。彰くん、紫穂里さんのことを少しだけ手伝ってあげて」
どうやって手伝うかを百合に耳打ちされて、彰はまたしても男根をびくんと跳ねさせた。ごくりと生唾を飲み込んでから、自由のきく左手を紫穂里の尻肉に這わせる。
「ひゃうぅ……あぁぁ……。彰さん……何を……なさるのですか……」
彰の首筋にしがみついたまま、令嬢実習生は看護婦帽だけの裸身を引きつらせた。
「紫穂里さんがリラックスできるようにしてあげるんですよ」
小ぶりな美尻の合わせ目を深々とまさぐり、秘めやかな小穴へ指先を突き入れる。
「あひぃっ……」
短い悲鳴とともに、がくんと膝から力が抜けた。処女の身体は無意識に脚を強ばらせていたのだが、恥辱の刺激に不意打ちされて筋肉への神経伝達が途切れたのだ。
上体の重みにまかせて尻肉は一気に落ち、たくましくそびえる男性器の真上にしゃがみ込んでしまう。待ちかまえていた亀頭が女肉穴を押し広げ、封印を突き破った。
「ひいっ……んひいいいいいいいいいいいいいっ……」
高く澄んだ叫びが浴室に響き渡る。それは破瓜の痛みによる悲鳴なのだろうが、聞きようによっては歓喜を極めた時のよがり啼きにも思えた。
「あぁぁ……あっ……はぁぁ……」

太い肉杭で姦通された令嬢は、口をきくことすらままならない様子だ。たくましいもので押し広げられた女陰穴を投影しているかのように、唇を大きく開いている。

これまで守り通してきた処女を散らされて、姫唇は血の涙を流していた。ひくひくと痙攣して肉杭を喰い締めつつ、生涯に一度きりの血涙を滴らせている。処女喪失を悲しんでいるようでもあり、大人の女になったことを喜んでいるようでもあった。

「おめでとう。処女喪失という第二の初潮で、紫穂里さんも大人の女になったのよ」

百合は、処女喪失という最高の光景を鑑賞しながら自慰にふけっていたのである。

太く長大な肉杭で貫かれた紫穂里は、今度こそぐったりとしていた。大股開きのまま女陰穴から破瓜の証を滴らせ、息も絶え絶えで彰の胸板に上体を預けている。

しばらくの間、彰は令嬢実習生が脱力しているのにまかせた。そうすることで、男性器の太さや形などを覚え込ませ、彰のためだけの女陰穴として型取りしているのだ。

紫穂里が落ち着いたのを見計らって、尻穴への指責めで『看護』をうながす。

「ひいっ……んひぃぃ……。お、お尻まで……ひっ、ひぃ……許してください……」

指先が抜き差しされるたびに肢体は反り返り、投げ出された美脚はわなないていた。尻穴で奏でられる背徳の旋律に操られて、令嬢実習生は股間をうねらせてしまう。

「あひっ……ひぃっ……んあぁ……。おかしく……おかしくなってしまいます……」

ぐったりと脱力しているのに、尻穴への責めで強制的に女体をくねらされているのだ。男性器で磔(はりつけ)にされたまま腰をうねらせているのだから、女になったばかりの花肉は痛みを訴えている。しかし、その痛みが霞むほどの快楽が女体に響き渡っていた。お尻の穴で妖美な愉悦を味わわされているだけでなく、薄皮から剥け出ている女芯にも快楽が鳴り渡っている。尻肉をくねらせるたびに彰の下腹部で女芯をこすられ、腰が抜けるかと錯覚するような快楽を響かされていた。

「お尻は……お尻だけはお許しください……んうぅぅ……あっ……あん……」

気品ある美貌は、もはや苦痛の表情を浮かべていない。陶酔の顔つきをしている。

尻穴と女芯で官能の音色を奏でられているうちに、破瓜の痛みはすっかり薄らいでいた。それどころか、肉杭でかきまわされることが心地よく思えてくる。尻穴と女芯で響く快感が女陰穴で共鳴し、女陰穴を喜ばせているのだ。

「んあぁ……あぁぁ……あん……。彰さんのものがだんだんと……はあぁ……」

尻の谷底に息づくすぼまりを指先で犯されるたび、妖しい官能に灼かれて紫穂里は股間を揺すりまわす。そして、抜き差しに命じられるまま尻肉を跳ね上げ、処女血も乾かぬ女陰穴で男性器を貪りしごいてしまう。処女を散らされたばかりだとは思えないくらいの淫奔さで腰を使い、しかも歓喜の喘ぎをもらしているのだ。

「私……彰さんのもので……気持ちよくなってしまっています……。はしたない私を……どうかお許しください……あっ……あんっ……ああん……」

令嬢の姫肉穴は、初々しい喰い締めとともに早くも喜びの蜜をあふれさせている。

「ううっ……僕……もう我慢できません……。紫穂里さんの看護が気持ちよくて……」

処女膜を突き破った衝撃に加え、誰一人として通ったことのない狭隘な肉穴を何度もえぐり抜いたため、たぎりにたぎっていた牡欲が一気に暴発してしまう。

びゅぶっ……びゅぶぶっ……ぼびゅっ……ぶぶびゅっ……びゅぶぶぶぶっ……。

裾野を広げた亀頭は、頂の割れ口から灼熱の白濁汁をほとばしらせる。処女肉を征服し、清らかな肉穴に初めて男性を刻み込んだこと喜ぶかのように、力強く脈動しながら精液を噴き上げていた。昨日までは性の喜びすら知らなかった令嬢実習生を女にして、あまつさえ濃厚な牡汁を膣奥深くへ注ぎ込んだのだから。

「あああ……あひっ……んあぁ……。彰さんの……精液が……いっぱい……」

処女を捧げたその男性器によって、あふれるほどの牡汁を容赦なく注ぎ込まれ、紫穂里は半ば気を失ったようになっていた。初めての膣内射精に放心している。

たくましい肉杭によっていっぱいに押し広げられた女陰穴は、ひくひくとおののいて太すぎる異物を喰い締めつつ、精液と処女血の入り混じった汁を滴らせていた。

たくましい肉杭を根本まで打ち込まれたその瞬間、潔癖症の美人看護婦は高い悲鳴とともに身をのけ反らせる。ひとたびは広げられたことがあるとはいえ、何年もの間すぼまったままだった女陰穴にとって、彰の男性器は太すぎたようだ。巨躯を誇る肉柱で女体の中心部を容赦なく広げられ、最奥まで征服され、蘭は息も絶え絶えだ。

「彰くん、蘭のあそこはどう？」

「すごくきつくて……気持ちいいです……」

「吸いつき具合はどうかしら？」

「窮屈さの方が際立っていて、吸いつきは具合は百合姉さんの方がいいです」

「だったら訓練させないといけないわね。彰くん、手伝ってくれるかしら？」

放心したようになって脱力している蘭を挟んで、百合と彰は蘭の女陰についてあれこれと品評している。女性器の姿を品定めされただけでなく、中身の狭さや味わいまでも審査され、身の置き所がないほどの恥じらいに蘭はさいなまれていた。

「や、やめてよ、二人とも……。あ……彰……そのけがらわしいもの……早く抜きなさい……んっ……んうぅ……んあぁ……」

女体の底に打ち込まれた肉杭を引き抜こうとして、しきりと身をよじらせる蘭。男性器を打ち込まれた上に秘花まで品評され、羞恥に灼かれて肢体をくねらせている。

ほんのりと赤らんだ蘭の耳元へ、白衣の女神は唇を寄せた。
「生身のおちんぽをあそこでくわえ込んだのは何年ぶりかしらね？　彰くんのおちんぽはどう？　腰が抜けるほど気持ちいいでしょ」
耳へ吹きかけられるわずかな息にすら、蘭はひくんと身体を引きつらせる。
「き、気持ちいいはずなんかないでしょ。おぞましいだけよ……んんっ……ん……」
理性がそうさせているのか、巫女を思わせる美人看護婦は白衣の肢体をもがかせ続けていた。まがまがしい男性器から逃れようとしているのだが、両手を押さえつけられて右足を背後から抱え上げられている姿では、膣穴の奥深くまで征服しているそれを引き抜くことなど到底できない。蘭は、男性器という肉杭で磔にされているのだ。
「んあぁ……あひっ……抜きなさい……抜きなさいったら……んあぁ……あん……」
どんなに身をよじろうとも男性器はびくともしない。股間をくねらせればくねらせるほど女肉穴をかきまわされ、かえって女の喜びをかき立てられてしまう。
「あっ……ああぁ……ああん……。ぬ、抜いて……抜いて……ひっ……あひん……」
女陰穴を強制的に拡張された状態で、さらに荒々しくえぐりまわされているのだ。男性器から逃れようとしているにもかかわらず、かえって官能を奏でられている。肉杭で磔刑にされた蘭は、もがくほどに感じてしまうという恥辱に陥っていた。

「蘭ったら、そんなに彰くんのちんぽが気持ちいいの？」
眼鏡の奥の瞳を淫らにぬめらせつつ、百合は妹の耳やうなじを舐めしゃぶっている。
「よ、喜んでなんか……いるわけないでしょ……んあぁ……あひっ……ああん……」
熱い喘ぎをもらしつつ白衣の肢体をくねらせている蘭だが、次第にその動きが鈍くなってきた。罠にかかった牝鹿が暴れることの無駄を悟ったかのように、男性器で磔にされた蘭も、あらがうことの無益さを思い知らされたのだ。また、自らが腰をうねらせることによって女陰穴をかきまわされ、脱力するほどの快楽を味わわされていた。
ぐったりと脱力した蘭は、姉の胸に背をもたせかけ、絶え絶えの息づかいで脚をわななかせている。腰の中心部を彰の肉杭で固定されていなければ、立っていることもままならないだろう。彰のことを子どもあつかいし続けていた蘭は、いうなれば彰の男性器に屈服したのである。あらがう力もなくなって征服されたのだ。
「どうしたの、蘭？　彰くんのおちんぽが気持ちよすぎたの？」
「ち……ちがうの……。そんなんじゃ……」
氷のように冷ややかな美貌は今や上気しており、視線は宙を漂っている。
「ふふふ……。蘭のあそこ、彰くんのおちんぽで型取りされているのよ。彰くんのものの太さに合わせて広げられ、亀頭の張り出し具合も覚え込まされて……」

「い、いやよ、そんなの……。んあぁ……ひっ……あん……あんっ……」
姉のささやきに蘭はあらためて身をくねらせたが、たくましい男性器で女肉穴をかきまわされることとなって、歓喜の悲鳴を上げてしまう。わずかながら回復しつつあった体力は、肉杭がもたらす快感により、またしても根こそぎ奪われてしまった。
「蘭さんのあそこが気持ちよすぎて……じっとしていられません……」
彰は、ゆっくりと腰をつかい始める。引き抜きから打ち込みまで、じっくりと時間をかけ、男性器の太さや固さを女陰の秘粘膜に思い知らせた。
「ひいっ……あひっ……んあぁぁ……。だ、だめ……動かないで……ひぃぃ……」
艶々とした黒髪を振り乱しながら蘭は肢体をくねらせる。
たくましい肉柱で秘めやかな粘膜をこすられ、脱力しきった女体ですらなお身悶えしてしまうほどの快楽を味わわされていた。
「だめっ……だめぇ……。あそこがこすれて……んひっ……ああん……」
大きく押し広げられている女唇と連動しているのか、蘭の唇はしどけなくゆるんでいる。半開きの唇からは歓喜の啼き声が放たれ、それと呼応するかのように、いっぱいに拡張された女唇は喜びの涙を流していた。張り出しのきいた亀頭が引き抜かれるたび、甘美な音色とともに熱い蜜汁がかき出される。

「蘭のあそこは本当に正直ね。喜びの涙が床に滴り落ちているわよ」
「ち、違うの……。これは……んあぁ……あっ……あん……」
「ひさしぶりに生身の男性器をくわえ込んだから？　それとも彰くんのおちんぽだからかしら？　あるいは……その両方かしら？」
姉の舌でうなじを舐めまわされたり、熱い息吹で耳をくすぐられるだけで、蘭は女体を引きつらせていた。肌という肌が敏感になり、全身が性感帯になっているのだ。
それほどまであからさまによがり悶えていても、いまだに蘭は感じていることを認めようとしない。
「蘭さん……。僕のちんぽ、気持ちよくないですか？」
処女も同然の狭い女肉穴を楽しみながら、彰は蘭の顔を間近から覗き込む。
「き……気持ちいいはずなんかないでしょ……」
切れ長の目をした美人看護婦は、紅潮した顔を背けた。
「だったら、こうすればどうでしょう？」
彰は、左手の小指と薬指で下着を脇へずらしておきつつ、人差し指と親指とで女芯をとらえる。剥けかかっている包皮を根本までずり下ろし、敏感な蕾を摘み上げた。
「ひいっ……んひぃっ……。だ、だめ……やめなさい……そこだけは……あん……」

最も感じやすい蕾を剥き身で摘み上げられ、くりくりと揉み転がされ、白衣をまとった肢体はめくるめく快楽に反り返る。女体が反り返ったことによって股間の中心部を男性器でえぐりまわされ、そこからも快楽がこみ上げてくる。

「んあぁ……あひっ……ああん……。だめ……そこ、つままないで……ひぃぃ……」

巫女を思わせる高潔な美しさの看護婦は、二カ所で快楽を味わわされて、はばかることのない悲鳴を上げていた。女体の芯にまで官能を響かされ、ふしだらなよがり啼きをこらえきれずにいるのだ。

「勤務中の蘭しか知らない患者たちが今の声を聞いたら、どう思うかしら？」

百合の左手は、今や蘭の腕を押さえつけてはおらず、いつの間にか妹の背中の中にもぐり込んでいた。ブラジャーのホックを探り当てると、片手だけで器用に外す。

「ああぁ……。姉さん……何をするの……」

胸元の締めつけがなくなった頼りなさに、蘭は狼狽の声をもらした。

「蘭の潔癖症を治すには、こっちの蕾も摘み上げる必要があるでしょ……」

胸元のファスナーを下ろし、白衣の中に左手をもぐり込ませる。ブラジャーの肩紐をずり下ろしてから、百合ほどではないにしろ十分に豊かな乳房をつかみ出した。

「ほら、彰くん……。蘭の乳房もなかなか魅力的でしょ」

眼鏡の内の瞳を嗜虐にぬらめかせつつ、手のひらにあまる豊乳を揉みしだく。たわわな乳肉をすくい上げ、指腹をめり込ませて、極上のやわらかさを誇示した。薄紅色をした乳首を摘み上げて、彰へ見せつけるかのようにしごき上げる。

「ひっ……ひぃっ……あんっ……。だ、だめ……姉さんまで……ああん……」

陰核にも劣らないほど敏感になっている乳首を巧みな指づかいで翻弄され、蘭はいいようによがり啼かされてしまう。

「お乳が……お乳が出ちゃうの……あっ……あひっ……んはぁぁ……」

ぷっくりとふくれ上がった乳首は喜びに悶えてびくびくと脈動し、しごき上げられるたびに乳汁を噴き上げていた。蘭本人にしか見えない歓喜の乳汁である。

女陰穴と女芯だけでなく乳首でも官能を奏でられ、蘭は女の喜びに悩乱していた。姉と彰と二人がかりで責め犯されて、すっかり快楽に溺れている様子だ。

「いい加減に認めなさい。彰くんのおちんぽが気持ちいいって」

「そ、それは……」

陶酔の表情でちらりと彰の顔をうかがった後、蘭は恥ずかしそうに顔を背ける。

「蘭が認めないのだったら、それでもかまわないわ。私と紫穂里さんで彰くんを看護するから。見てご覧なさい。紫穂里さんも、すっかり発情しているわ……」

ひざまずいている令嬢実習生は、病院の屋上で繰り広げられている陵辱に見入っていた。身を乗り出すようにして見つめているだけでなく、自らの右手をスカートの中に忍ばせている。潔癖症を治すためという名目で行われている二人がかりでの姦淫を見つめているうちに股間の底がうずいてきて、指が吸い寄せられてしまったのだ。

彰たちの視線に気づいて、紫穂里は恥じ入るようにうつむいた。しかし、スカートの中にもぐり込ませた右手はそのままで、下着の上から女陰の盛り上がりを指腹で揉みまさぐっている。紫穂里は自慰という概念すら持っておらず、その指づかいは極めてつたない。どんなに指先を蠢かせようとも悶々としたわだかまりを解消できず、かえって牝の欲望を高ぶらせてしまう。

「彰くんのおちんぽが本当に嫌なら、抜いてあげてもいいのよ。どうする、蘭？」

熱い息吹を耳に吹きかけつつ、百合は巧みな指づかいで蘭の乳首を責めていた。

彰としては蘭の『治療』を中断する気など全くないが、答えをうながすために男根を少しずつ抜いていった。蘭の表情を見つめながらゆっくりと。

氷を思わせる美貌は恥じらいと戸惑いに彩られていた。しかし、男性器が徐々に引き抜かれてゆくにつれて、何かを訴えるかのような切なげな顔つきになってゆく。

肉胴を全て抜き、あとは亀頭を残すだけとなった時……。

「いや……。待って……。そ、その……」
恥じらいに灼かれてまぶたをきつく下ろしつつ、蘭は熱い息づかいでささやいた。
さらに、すがりつくようにして男性器を喰い締め、抜かないように懇願している。
「認めるのね？　彰くんのおちんぽが気持ちいいって」
切れ長の目を閉ざしたまま蘭は無言でいた。だが、陰毛の茂った女陰門は、口に出せない欲望を代弁してふしだらに吸引し、おねだりの蜜涙をあふれさせている。
「あなた自身の口から認めなさい。でないと、彰くんを取られちゃうわよ……」
ためらいを払拭しきれない様子の蘭に、彰は力強く男性器をえぐり上げた。
「ひっ……あぁぁ……あん……あ、彰のちんぽ……気持ちいいよ……。私……彰のちんぽに感じているの……。彰のでいきそうなの……」
それだけ告白すると、あとは堰をきったように想いがあふれてくる。
「ずっと彰のことが気になっていたの……。でも、彰は姉さんのことばかり見ていて……。ついつい冷たく接しちゃって、悪いとは思っていたんだけれど……」
その告白を聞いているうちに、彰の中に愛おしさがこみ上げてきた。
「蘭さんがそんな風に僕のことを思っていてくれたなんて……」
愛おしさと牡欲に突き動かされて、彰は荒々しく腰を躍動させる。

発情した獣のように男性器を打ち込み、蘭の女陰穴を容赦なく責め犯す。
「ひいっ……あん……あぁん……。いいっ、気持ちいい……彰のちんぽ……とっても……んあぁぁ……あひっ……ひいいいいっ……」
彰を牡として認めた蘭は、はばかることなくよがり悶えて、牝の言葉を発していた。男性器でよがらされていることを告白し、股間の唇でも喜悦の涙をあふれさせている。
処女喪失の時には痛みに血涙を流していた女体も、数年の熟成を経て喜びの涙を流すまでになっていたのだ。処女と変わらないほどに初な女陰穴は、たくましい男性器にえぐり上げられて啼き悶えつつ、甘美な吸いつきで肉柱をもてなしている。
「ううっ……あうっ……。蘭さんのあそこ……気持ちよすぎて……本当に腰が止まらなくなっちゃいました……」
牡の本能に支配された彰は、自分でも驚くほどの荒ぶりで男性器を突き上げていた。処女と女の境目にいる蘭ならでは姫肉穴を、裾広がりの亀頭で貪り尽くす。締め出そうとするかのようにきつく吸いついてくる肉穴を牡欲のままにえぐり上げて、引き抜きとともに亀頭の張り出しで秘粘膜をかきこする。
冷ややかな美しさの看護婦を喜びに啼かせ、彰自身も牡の喜びに悶えていた。
「僕……こらえきれません……」

限界を超えた快楽に、男性器はひときわ激しく脈動する。熱くたぎった精液が尿道を駆け上がってきて、亀頭に刻まれた鈴割れから一気にほとばしり出た。
びゅぶっ……びゅぶぶっ……ぼびゅっ……びゅぼぼぼっ……。
どろりとした白濁汁が女肉穴を満たす。牡の象徴である白汁を膣粘膜へすり込むようにして、たくましい肉柱が荒々しい突き上げを繰り返している。
「あひっ……ひぃっ……ああん……。いく……いきそうなの……」
射精しながらのたうちまわる男性器で徹底的に女肉穴を蹂躙され、巫女のような美貌の看護婦はその女体にとどめをさされた。白衣の内に溜め込まれていた快楽が一気に噴き上げ、蘭の意識を歓喜の天上へといざなわれる。
「あぁ……んあぁ……ああああああああああぁぁぁぁぁぁ……」
女の喜びを極めての高いよがり啼きが、頭上の青空へと放たれた。
蘭は官能の頂に達し、気をやったのである。子どもあつかいしてきた彰の男性器で女の喜びを与えられ、自慰でしか達したことのない絶頂にまで導かれたのだ。
「ふふふ……。よかったわね、蘭。彰くんのおちんぽで『女』にしてもらって……」
姉からの声にも応えられないほど陶酔している蘭を、彰はなおも貪るように犯していた。肉体のみならず心にまで男根の威力を教え込むべく、獣のような荒々しさで。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!